だんぼー 陽蜂　日本ボーイスカウト京都第38団　昭和55年6月19日発行　第27号

第10回団委員会報告

昭和55年6月10日(火)　定例　於団ルーム。20:00〜22:45

出席者－西村、中川、河原、橘、園田、多門、五十嵐、小島、服部、末吉。

欠席者－＊黒宮、小川、西山、西脇、原田、三田、松本、永田。出席率56%（＊61%）

❋ 報告事項 ❋

1　団会議（6／3）各隊報告

各隊夏季活動計画について

ＣＳ隊－8／9〜12　府下京北町周山、下宇津　安威様方（五十嵐団委員紹介）＊日程は希望日。

ＢＳ隊－7／24〜27　左京区尾越町（昨年と同じ場所）＊大Ｓ大会参加のため短期。

ＳＳ隊－7／28〜8／1　移動キャンプにより8／1午前10時金沢集合に続き大Ｓ大会参加。

その他省略。

2　入団申込受付について。（小島）

9月の入団申込受付に先立ち団内兄弟等の希望者実体調査結果報告。

一般の入団受入については昨年同様、定員枠が少なく厳しい状況が予想される。

3　団ルームの整備について（末吉）

整備費収支報告－コラム参照。

新たにテーブルを京大教授後藤先生方より頂戴した。

カーテンを西脇団委員様より取付御寄付戴いた。

テント用のロッカーを購入しこれをもって今回の整備を終了。

団ルーム整備費収支報告

収入の部	
定額貯金より	81,696円
新年会会計より	10,000円
雑収入	454円
計	92,150円
支出の部	
保管庫　A	26,700円
同　B	28,000円
床張り	35,000円
合鍵製作費	2,450円
計	92,150円

4　団組織拡張委員会報告（小島）

5／19　小島、河原、松本、五十嵐、末吉。於ハウスホール。

育成会会則の草案を検討し、作成した。

5　団財政委員会報告（多門）

5／19　多門、橘、中川、石田、松本、小島、永田。於団ルーム。

5／27　多門、西村、中川、河原、園田、石田、松本、小島。於同上。

育成会・団の会計規則の草案を検討し作成した。

6　地区報告　（服部）

ＢＳ救急法講習会を京都連盟が計画中。

ＣＳ進歩課程内容変更56年4月より移行。

京都キャンボリー（合同）56年7月末〜8月上旬　3泊4日を計画。

❋ 協議事項 ❋

1　団育成会諸規則の制定について。

各委員会で検討作成された草案について協議し、制定すべく案文を公表することを決議した。

諸規則の種類と実施予定期日は次の通り。

○団育成会役員選出規定－昭和55年8月1日。

○団育成会会則。○団及び育成会会計規則。○団会計付則－以上－昭和55年9月1日。

以上の案文は6月中に配布する予定。

第三章　学問は考える喜び

広中平祐の青年教室　「若い日本人のための12章」の連載を続ける。裏面参照。

人間のチャレンジとして

学問の喜びとは、考える喜びだと思う。どんな分野の学問でも、何か新しいものを発見し、新しいものを創（つく）っていくことに本来の意義がある。発見と創造にこそ、人間のチャレンジとして意味がある。無上の喜びを味わうチャンスがあるのだ。そのためには考えなければならないし、考えること自体にも喜びがある。単なる知識の受け売りでは学問といえないし、また、あまり評価もされない。まして学問する喜びは味わえない。さまざまな知識も、考えるための資料に過ぎないし、読書も考えるためのきっかけとして最大の意義がある。

そう思えば知識を集めることも存外楽しいし、読書もそんなに苦にならない。耳で聴き、体で感じ、目で読んで考える。考えたあとでは聴いたこと読んだことは忘れ去ってもよい。覚えなければならない、忘れてはいけないと思うと大変である。本当をいうと、学問なんてそんなに難しいことではなく、考えることの好きな人であれば、だれでも学問することができるし、その喜びを味わうことができる。

人間はみな、本質的には考えることが好きなのだと思う。だから、ときどき、あまり考えすぎて悩んだりする。たぶんサルだったらそこまでは考えない。人間だから、考えなくてもよいことまで考えたりする。人間が生きていく過程で生命感が高まったり、また弱まったりする。生命感が高まるほど、情念も強まる。情念が想像をかりたてる。ときに想像力が働きすぎて妄想（もうそう）が生まれる。その妄想が新しい不安と苦悩をつくりだす。しかし、その情念にかりたてられ、ときに妄想にまで発展するほどの想像力が、学問においても画期的創造の原動力になるのだ。

人間は、はっきり予測できない変化変動に恐怖を感じ、また一方では動きもとれぬ膠着（こうちゃく）状態にいたまれなくなって新しい変化を願望する。そのように変化変動に対する人間のあくことを知らぬ関心が、芸術や学問の進展に大きく貢献して来た。自然と人間を動かす見えざる巨大な力に神秘を感じ、人知を超絶した神の摂理を畏（おそ）れて信仰が生まれ、宗教が発展した。

創造力かきたてる執念

地動説にまつわる有名な宗教裁判のあとで、「それでも地球は動いている」とつぶやいたといわれるガリレーは、天体の運行に関する観測と理論の研究だけでなく、地上の物体の運動と重力に関して重要な研究成果をあげて、後のニュートンによる万有引力の発見と理論構成に大きな踏み台を提供した。「自然という教科書は数学の文字で書かれている」というガリレーの言葉は、以来四百年近く現在に至るまで、自然の中の運動と変化に数学的整合性を読みとろうとする科学者たちの努力と勇気の出発点を象徴している。

もともと牧師になろうと志していたといわれる天文学者ケプラーは、神を信じて自然の整合性と秩序を疑わなかった。その信仰ともいえるほどの信念が、一見バラバラで膨大な観測データの山積の中から、簡潔で見事な惑星運動三法則を発見する洞察力と勇気を背後から支えていたと思える。

アインシュタインの「神は、サイコロをふって自然を創ったはずはない」という言葉に示される信念が、彼の天才と併合して、ニュートン力学以来だれも疑わなかった時空の観念を根本から改革する相対性理論を創りだしたのだと思う。また、その信念が、後年の彼をいくつかの有名な物理学論争にかりたてた。アインシュタインは、いくつかの論争で敗れたが、そのつど、相手の物理学者が自分の理論の完成にやっきとなって尽力する動機を与えた。執念が直接、間接に創造を促進した。

その道の物知りといわれる学者の中には、案外つまらない仕事しかしない人は珍しくない。知識とか技術という点では、まだそれほどでもない二十代の若者が、意外と画期的な発展のきっかけを創る例は多い。なぜだろう。二十年、三十年も一つの専門の研究にうちこんで来て、知識も技術も十分身についているはずの四十代、五十代の学者たちに、斬新（ざんしん）な創造の能力が減退するとしたら一体なぜだろう。知能は高まりこそすれ、そうそう早々と低下するものではないはずだ。

詰め込みに学問なし

もし年功とともに減退するものがあるとすれば、それは、空想に突っ走るほどの想像力と、空想を何としても実現しようとする執念くらいだろう。晩年に至るまで群を抜いて創造力を発揮する学者たちは、ほとんど例外なく、大人げないほどの執念と、自分でもものてあますほどの想像力を保有している。

日本の学校教育の一般的な欠陥の一つは、知識を詰めこむ場と、ものを考える場とを、あたかも相反する二つの場であるかのように分けてしまっている点ではないだろうか。

たとえば、大学に入るまでは受験目標の枠（わく）にはまった受け身の勉強で、知識と技術を詰めこむだけ。大学に入ってからは、いまさら知識のための勉強なんて、といわんばかりに、思考遊戯だけに突っ走る学生が少なくない。受け身の勉強とか枠にはまった知識の詰めこみでは、学問の楽しさは到底味わえない。

考えるために学び、学びながら考える、ときおり枠をはみだして想像力を働かせ、対話と討論を楽しむ習慣は、まだ頭も心もやわらかい初等・中等教育の段階から始めておかないと、大学に入ってから、さあ自由思考をといってもうまくいくはずがない。排他的で姑息（こそく）な考えにこり固まったり、一人よがりの思考遊戯に走るだけに終わる。

受験のために、あれだけ勉強したことを、どれだけ生かしているといえるのか。受験のための教材がそのまま生きることを問題にしているのではない。そのための勉強をとおして感じとった、考える喜びがあとあとまで生きて働くことを強調したいのだ。

私自身、初等、中等、高等の勉強の各段階で、そのとき、そのときの教材について考える楽しみを味わった、レベルこそ違え各教材にすばらしい背影のあることを感じて喜んだ経験がある。これは実に幸いであったといえる。

社会に出て仕事をする場合も同様である。実社会では、準備しながら仕事をしなければならない。

仕事をしながら、仕事を通して、また新しい方向をみつけて準備を始めていなければならない。実社会に出て仕事をもつことの面白さがそこにある。専門的な学問の研究でも、思索することが、既成の知識を学ぶ必要性の実感を生み、また、学びとった知識が自分の思索をさらに深めていく。

「自分の発想」が大切

ときとして、知的レベルが低いために、知識が乏しいために、かえって奇抜な発想が生まれる。もちろん、その時点で、発想を実績にまで発展させる技術と力量がなければ、その発想もアワのように消え去ってしまうだろう。それでもそのような発想をもつことは意味があるのだ。

後に、ある年齢に達したとき、ある日突然、思いだされたり、また、もともとの発想そのものは幼稚であっても、永い年月の間に意識下で次第に成長していて、その間に学んだ新しい知識や他の人の発想とうまく結びつき補足しあって、びっくりするほどの創造に発展する。だから、どんな幼稚なレベルでも、自分で考え、自分の発想をつくってみることが大切なのだ。

学校教育では、場合によっては教えこむ知識の量を少々減らしても、考えさせる時間を増やした方が子供の将来のためになる。考えさせる教育の難しさは、生徒の興味の方向と程度がまちまちで一律には扱えない点と、考える習慣とか雰囲気（ふんいき）は一朝一夕でできない作業だという点にある。教師の苦心するところである。親にも、本人にも責任がある。

学問は思考力を強める。強い思考力は、一度身につくと離れない。社会がどのように変わっても効用を失わない。学問は生活体験の意味を深める。身のまわりの自然界、人間社会の出来事に対する関心を高め、理解を深め、それらと自分自身とを何らかの形で関連させていこうとする興味と勇気を生む。これが生きがいとなる。

この章終り。続く